View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Konan University Repository

KONAN UNIVERSITY

ママも知らない? パパの子育て - 乳幼児をもつ父親の調査から (2010年度 公開シンポジウム報告 父親の子育て 母親の子育て)

著者	新道 賢一, 川口 彰範, 濱田 智崇
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	12
ページ	23-32
発行年	2011-02-28
URL	http://doi.org/10.14990/00002708

ママも知らない？　パパの子育て
――乳幼児をもつ父親の調査から

新道　賢一・川口　彰範・濱田　智崇

甲南大学人間科学研究所では、共同研究プロジェクトの一環として、「子育て環境と子育てに対する意識調査」を一〇年ほど前から東灘区内で継続的に実施している。二〇一〇年五月には父親を対象とした調査を行った。その結果の中間報告も含めて紹介する。

新道賢一
甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員。甲南大学人間科学研究所の研究員として父親の子育てに関する調査を進めている。カウンセラーとして長く子育て支援に携わっている。

川口彰範
ＮＰＯ法人関西こども文化協会相談員、兵庫県立須磨友が丘高等学校・非常勤講師（心理学）。その他、公立・私立の高校で理科教育に携わる。甲南大学人間科学研究所の客員特別研究員として父親の子育てに関する調査を進めている。

濱田智崇
帝塚山学院大学・非常勤講師。『男』の悩みのホットライン・代表。男性による男性の相談を積極的に展開している。甲南大学人間科学研究所の客員特別研究員として父親の子育てに関する調査に携わる。

新道　ただいまご紹介に預かりました新道です。よろしくお願いします。ご紹介がありましたように、後で二人出てきまして、三人で一つの発表をやらせていただきます。

私は普段、一八号館にありますカウンセリングルームで相談員をやっている臨床心理士です。三歳の男の子の父親でもあります。先ほどの大日向先生の話ではありませんが、夕べは私が家に帰ったときもうちの子はすごく元気に太鼓をたたいてうろうろしていたんですけれども、夜中に突然泣き出しまして、「耳が痛い」と言うんですね。先ほど妻からメールが来まして、急性中耳炎だったということです。バファリンを飲ませて寝たのが三時。それから一時間おきにずっとうんうんなっていたので、ちょっと私も睡眠不足気味で、今もぼーっとした状態で発表させていただきます。よろしくお願いします。

そういう小さい子がいるので、ＮＨＫ教育の『すくすく子育て』をたまに見ることがあるんですけれども、その中に大日向先生も登場されます。その大日向先生の後でこういうお話をさせていただくのは光栄であると同時に、かなり緊張しております。

今日報告する内容は、「ママも知らない？　パパの子育て――乳幼児を持つ父親の調査から」というタイトルをつけさせ

ていただきました。乳幼児を持つ父親の調査と大きく出ても、私自身がこの立場ですから、調査や研究と言うのは非常にこっぱずかしい気がして、居心地の悪い感じでずっと研究を続けております。研究と言っても、私自身が日々試行錯誤の毎日です。今子どもは三歳で、反抗期、あまのじゃくの真っ最中なんですね。例えばお風呂に入るというだけで、毎日バトルが繰り広げられるわけです。私はお風呂係なんですけれども、「お風呂に入るで」と言ったら、まず「いらんの」と。それでどうするか。そのまま泣き叫んでも風呂まで連れていくか、「水鉄砲で遊ぼうか」と言って連れていくか。一〇〇円ショップで買ったようなおたまを持って、「ちょっと料理する」と言って連れていくか、「お父さんのアワアワとってくれる?」と言うか、日々そういう試行錯誤を繰り返してやっているわけです。

このような立場なので、調査とか研究というのもおこがましい、と思いながらも、今回このような調査をさせていただき、同じような立場のお父さんからいろいろ返答をいただきました。私自身が非常に勉強になることもありましたので、このあたりのことはぜひともフィードバックして、世に伝えていかなければという使命感も同時に持っています。

今回の報告は、甲南大学のいわゆる子育て研究会の父親班として研究をやっている関係で三人でやります。三人の分担は、私が前振りのような話をさせていただきまして、研究の内容のほうは二人にやっていただきます。また今回の研究をまとめるに当たっては、リサーチアシスタントの方々には大変な労をとっていただきました。ありがとうございました。

父親の調査ということで、現代の父親を取り巻く状況というところからお話をさせていただきたいと思います。

まず最初の話題です。改正育児・介護休業法が六月三〇日に施行されました。これは今日のシンポジウムの冒頭から言われているとおりです。どうなったかというと、要するに男性の育児休業が取りやすくなりました。それから、もう一点、「イクメンプロジェクト」というものが始まった。これは何かといいますと、二〇一〇年六月一七日にホームページが公開されたもので、厚生労働省雇用均等・児童家庭局が推進しているものです。目的は、男性の育児休業取得率を現状の一・二三%から二〇二〇年度（一〇年後）に一三%に上げることを目標とする。一〇倍以上ということですね。

続きまして、ここ一〇年の父親というお話をします。まずあるのが、父親の子育てブーム。例えば、男性による子育て本の出版が始まりました。山田正人さんという方が二〇〇六年に『経産省の山田課長補佐、ただいま育休中』［日本経済新聞社、二〇〇六］という本を出されて、現在横浜市の副市長をされています。そういう本が出だしたのがだいたいこの頃のようです。育児休業が取れるようになってからという流れですね。それか

ら、男性向け育児雑誌が出てきたり、『ひよこクラブ』『たまごクラブ』という育児雑誌にもお父さん用のものが入ってきたりするようになりました。テレビドラマでは『オトコの子育て』があります。サラリーマン金太郎でおなじみ高橋克典が主役になっているものです。あと話題になったところでは、「子育てパパ力検定」なんていうのがありました。以上が父親の子育てブームになります。ここに、子育てを楽しむ父親像というものが見てとれるかと思います。

さらに、政策の変化があります。一九九〇年の一・五七ショックから始まりまして、いろいろありました。これらは何かというと、少子化対策、児童虐待の防止、男女共同参画社会の実現の三点をはかるためにいろいろな施策がとられてきたということです。

一方、最近の男性を取り巻く社会状況については、男性の育児休業取得率の最新のデータはまだまだ一・七と低いです。完全失業率は若干落ちたとはいえ、まだ五％超えている。自殺者数は平成一〇年度から三万人を超えている。自殺者も男性のほうが多いです。働き盛りの方が多い。一言で言うと、厳しい世の中なわけです。このような中で父親は今どのように子育てをしているのかということを調べたいという気持ちが背景にありました。

それから、甲南大学における子育て研究の歴史にも少し触れておきたいと思います。二〇〇〇年から子育てに関する調査が続けられてきました。最近の調査の中で、母親が父親に求めるものというのがあります。これは何を求めているかというと、「いざというときに頼りになる存在であること」、それと「日常的共同養育者であること」、こういうものをお母さんはお父さんに求めているということがわかってきました。

では、父親は母親の要望に応えているのかという話になりますと、父親に関する研究は少ないわけです。これまで、子育て研究といえば母親研究が中心でした。なので、実際に父親の声を聞いてみるということで、就学前の子どもを持つ父親へのインタビュー調査を昨年の初め頃にやりました。どうだったか。

これは私が一番最初にお会いしたお父さんですが、「正直自分でやっているのが子育てかどうかというとちょっとわからないですけれども、子どもと遊んでいるのは楽しい」と言うわけですね。「お父さん、子育てについて聞かせてください」とインタビューしているのに、「自分がやっているのが子育てかどうかわからない」。この意識の差に愕然とした覚えがあります。

こんなものがどんどん出てくるんです。「結局、最終的にはたぶん母親なんやろうな。やっぱり母性というか、ここから出てきたということには全然かなわないな」とか、「父親は母親に勝たれへんな、絶対。パパがいなくて子どもが泣くことはない」「子どもが小さい頃は父親がいなくても生きていける。幼

児のときは父親はあまり意味がない。父親の役割？　あるんでしょうかね、そんなこと」。こんな言葉が次々に出てくるわけですね。それで考えさせられるわけです。父親とはいったい何なのか。ブームだから父親をやっているのか。そんなわけないですよね。父親は今どうなっているのか。

先ほどのインタビューは二一名の協力者にやっていただいたので、この二一名の意識だろうと言われれば、そうなのかもしれない。では、どうなっているのか。実際、どのくらい子育てして関わっているのか。どのような気持ちで子育てをしているのか。父親であることをどのように考えているのかと。いうことで、このたび第二回子育て環境と子どもに対する意識調査（父親版）を実施させていただきました。報告については、あとの二人にお願いしたいと思います。

川口　先ほど紹介していただきました川口と申します。僕自身も小二の女の子の父親なので個人的にいろいろ言いたいこともあるんですが、あまり時間がないので、早速内容に入っていきたいと思います。

今年五月から六月にかけて、就学前の子どもを持つ父親に対してアンケート調査をお願いしました。東灘区でアンケート用紙を配布して、郵送により回収しました。内訳は前に出ているとおりですが、全体の回収率は一七％です。

調査の内容は基本情報のほかに、大きく五つのパートに分かれています。パート一は妊娠時から出産までのことについてです。パート二は今現在、普段やっていること。パート三が子育て中の気持ち。パート四、パート五では父親と母親の役割とか、家族にとって父親はどんな存在なのかということを聞いています。

今日はこの中から、主な結果について見ていきたいと思います。まず、父親の年齢は二一歳から五九歳までの方が協力してくださいました。平均年齢は三七・五歳。お子さんの年齢は〇歳から六歳までです。アンケート返送期限が六月四日だったので、誕生日を迎えて六歳になっている子という子はまだ少ないですね。

お仕事の状況ですが、真ん中のグラフ、帰宅時間のところを見てもらうと、夜八時までに帰ってこられる方が四割ぐらいおられる。一〇時までに四分の三のお父さんが帰宅できる状況です。週休も二日ある方が七割強なので、どちらかというと、自宅で過ごせる時間があるほうの父親たちかなという感じがします。

出産の立ち会いについて、「陣痛期のみ立ち会った」「出産時のみ立ち会った」「陣痛から出産まで立ち会った」、合計で七六％の父親が立ち会いをしています。九年前、二〇〇一年の第一回の調査のときには立ち会いの率が五〇％くらいだったので、

この九年間に一・五倍に増えていることがわかります。

育児休暇ですが、三％の父親が利用しています。先ほど一・七二％とか、一・二三％という国の数字が出ていましたが、それと比べると多い感じがします。

普段どんなことをしているかということで、一一項目について調査をしました。「ほとんど毎日している」または「週三、四日している」と答えた人が多かった順番に並べています。「抱っこ」は八一・一％のお父さんが週三、四日以上しています。「おむつ替え」が六割ぐらい。「言葉で叱る」「家事分担」は約半数のお父さんが週三、四日以上しているということです。その次が、「子どもと一緒に夕食を取る」「夫婦で子育てについて話し合う」「子どもの相手をして遊ぶ」「お風呂に入れる」「寝かしつける」の順番になっています。

上位に来ているのは短時間でできることだったり、時間帯を選ばないことですね。まとまった時間が必要だったり、子どもの生活時間に合わせないといけないことはなかなかしにくい様子がわかります。それから「知人と話す」というのが一五・九％。男性はなかなか外で子どもの話をしないということですね。

それぞれについて、お父さんが実際にしたいと思っているかどうか、気持ちの部分も聞いています。それがこちらです。左側は「進んでしている」と答えた方が多かった順に並べています。やりたいという気持ちがあるし、実際にやっているということですね。上位は「抱っこ」「遊ぶ」「お風呂」「夕食」。直接子どもと関わったり、触れ合ったりする内容が上位に来ています。右側のほうは、「できていないがしたいと思っている」と答えた方が多かった順です。「知人と話す」がトップに来たのがちょっと意外だったんですが、実は話したいと思っている方が結構いるということですね。二番目の「夕食」も親子で話す時間ということでしょうから、上三つを見ると、子育てを巡ってもっとコミュニケーションをとりたいと思っているんだなということがわかります。

次のスライドです。先ほどまとまった時間が必要ということがあったので、それに関係して、二つの質問について見てみたいと思います。赤いところが見えますか。「非常にそう」「まあまあそう」と答えた人の割合が赤いところです。青いところが、「あまりそうではない」「全然そうではない」という人の割合です。上のほうを見てもらうと、「子どもといる時間がもっと欲しい」と言っている方が九割です。それから、「仕事を減らしてでも父親の在宅時間を長くしたほうがいい」と思っている方も七割いるということです。

それから、子育てにまつわる気持ちについてもいろいろ聞いているんですけれども、全体の印象としては、非常に肯定的な気持ちや感情を持っているお父さんが多いなということです。三つ見ておきます。「毎日の子育てが楽しい」という質問には、

九二％の方が「非常にそう」「まあまあそう」と答えています。それから、「子育ては面白い」というのが九一％。「子育てをしていると実感する」が七七％。あまりお父さんは悩んでいないという話が先ほどありましたが、少なくともアンケート用紙で「楽しいですか」と聞かれると、これだけたくさんのお父さんが「楽しい」と答えています。

では、「実際どんなときに楽しいと感じますか」ということを自由記述で答えてもらっています。その中から幾つか見たいと思いますが、「一緒に遊ぶ。一緒に寝る。一緒に食べる。一緒にテレビを見る。一緒に歌う」、一歳の女の子のお父さんですね。楽しそうだなという感じがします。「夜に寝るときに、『パパ、一緒に寝よう』と言ってくれるとき。普段なんでもないときに『パパ、大好き』と言ってくれるとき。子どもの楽しそうな顔、喜んでいる顔を見たとき。大人が思いもよらない行動をとったり、考えもしない発想を聞けるとすごいなと思う」ということですね。それから、「できないことができるようになり、うれしそうにしている子どもを見て。子どもが保育所のことを言ったり、自分が仕事のことをかみ砕いてしゃべるとき。現在二歳半なのですが、日々成長が見られます。例えば『もう』と言って怒り出したり、『お片づけをしなさい』と言うと、『無理』と大人びた言葉で反論したりできるようになりました」。こんなふうにしてみると、子どもとの生活の一こまを楽しんでいる様子が伝わってくるなと思います。

ここまでをいったんまとめておきます。今見てきたのがパート三までのところです。「もっと子どもと関わりたい、もっと時間が欲しい」というふうに思いながら頑張っているお父さん、それから「子育てが楽しい」と楽しんでいるお父さんの様子が見えてきたかなと思います。

ここまでは子どもとどう関わっているかとか、そのときにどんな気持ちがするかということを主に聞いていますから、アンケートに答えてくれたお父さんたちは、普段の自分のこと、子どものことを思い出しながらアンケートに答えていくということになります。大ざっぱに言うと、自分と子どもですね。父と子の二者関係の中でいろいろ子育てのことをイメージして答えてもらったのが今までのところです。

パート四、パート五に入ってくると、母親のことについてもいろいろと聞かれますから、ここから先は父、母、子の三者の関わりがイメージされていくとか、家族の中で父親である自分がどういう存在なんだろうかという形で自分のことを意識しながら答えていくことになります。ここから先では父、母、子、三者の関わりという中で、「頑張っている・楽しんでいる」だけではない、父親の意識の別の側面が見えてくることが予想されます。

ここでまたバトンタッチさせていただきます。

濱田　三人目の濱田です。私は前の二人と違って子どもがいませんし、時間も残り少ないのですぐに内容に入ります。二人から父親の現状について報告いたしました。ただ、アンケート回収率が非常に高いとまでは言えないですし、今回回答してくださったお父さんは、子育てを頑張っている、楽しんでいる方々であろうということは頭に入れつつ、続きを報告します。

まず、お父さんたちが自分のこと、あるいは家族との関係をどんなふうに思っているのか、その意識についてです。「子育てにおいて父親はなくてはならない存在である」という項目に対して、「非常にそう」「まあまあそう」と回答されている方は約九〇％。ほとんどの方は父親が子育てにおいて、なくてはならない存在だと思っているということです。ただ、この回答は「父親たるもの」が「子育てたるもの」になくてはならないと考えていることであって、自分自身が子育てにおいて、なくてはならないと考えているということとは、ちょっと違うという感じはします。

次に、父親と母親の役割です。「子育てする上で父親と母親の役割に差はないと思う」という方が三四・六％。逆に言いますと、だいたい六五％の方が、父というものと母というものは役割が違うのだと思っていらっしゃることになります。「子育てにおいて父親にしかできない（母親にはできない）ことがある」という質問に対しては、「非常にそう」「まあまあそう」が六五・四％。父と母には違う役割があって、やはり父親にしかできないことがあるんだと考えている方が多いということです。

その中身を自由記述から拾ってみますと、例えば「肩車」とか「力の要ること」「高い高いなど体を使って一緒に遊ぶこと」「全身を使って外で遊んであげること」「抱えあげて振り回すようなダイナミックなスキンシップ」といったあたりで、いわば体力系です。力の要ることはお父さんという回答が目立ちます。

次に、「しかり役」「男の子に対しては厳しさを教えたりする役」といった回答があります。ジェンダー意識とも関係しそうですが、しかるのは父親、あるいは社会のことを教えてあげられるのは父親。そういう役割を意識しているお父さんたちがいるということです。

さらに、理想的な父親のイメージを、自分なりに持っている方が四四・三％。自分は理想的な父親だと思う方が三三％で、これが高いのか低いのかよくわかりませんが、現代において、はっきりとした「父親モデル」はあまりないと言えそうです。理想の父親像についての自由記述では、「大事なときにガツンとできる父親」「しつけの厳しい昔ながらの頑固親父的な男の生き方」などがありました。「男は黙ってなんとかビール」と実際に書いている方もいましたが、こうしたものを見ると意外といまだに「昭和」を引きずっているという印象です。そうかと思えば、友達のように仲良くしたい、友達父親とでも言うよ

うなものを目指している方もいます。また、「社会のことは自分が教えるような父親でありたい」のように書かれる方もいらっしゃいます。

逆に、子育てにおける母親の役割ということですが、「母親（自分の妻）にはかなわないと思う」という方が「非常にそう」「まあまあそう」を合わせるとほぼ八割います。八割の方は、結局のところ子育てでは自分の妻、母親にはかなわないと思っているということです。

そして、八割の方が、「母親にしかできないことがある」と答えておられます。先ほど新道が少し紹介しましたインタビューでも敗北宣言のような発言がありましたが、それと一致する結果です。「母親にしかできないことは何ですか」とお聞きすると、やはり「授乳」が多いです。自分があやしても泣き止まなかった子どもが、お母さんがおっぱいをあげることでぴたりと泣き止む。そこで自分が傷つくという体験をされているお父さんは結構いらっしゃるようで、「（母親は）一番の安心を与えられる」「小さい頃からのスキンシップで居心地がよいと感じているのは母親である」「母性で最大に子どもを愛すること」「男では出せない愛情が母にはあると思います」「父親と一線を画すつながりの深さを感じる」「子どもが母性を求めるときに、それを与えることができる」等々、いわゆる「母性」というものが父親の中に強く意識されていることがうかがえます。

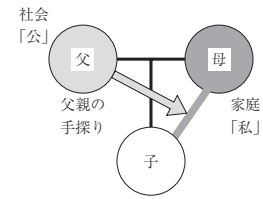
先ほども大日向先生から、母性愛神話についてお話しいただきましたが、今も父親の意識の中にそうしたものが存在すると言えそうです。父親にとって、やはり母親は「かなわない」存在であり、自分には担えないものがあると思っているようです。今回は子育てに積極的と思われるお父さんの回答をもとに考察していますが、そういうお父さんが子育てにかかわろうとするときに、母性愛神話が邪魔をしてしまうことがあるのかもしれません。また、これは想像の域を出ませんが、今回のアンケートに協力しなかったお父さん方の中には、もしかしたら母性愛神話を、いわば免罪符のようにして、子育てよりも仕事に打ち込んでいる、ということもありえるかと思います。母性愛神話は、母親に子育てのプレッシャーを与えることがあるだけではなくて、父親にとっても子育てに近づいていこうとする際の、障壁になると言えるかもしれません。

今回調査協力してくださったお父さんが、なんとか父親になろうと手探りで頑張っていらっしゃる様子もアンケートからわかります。ここでご紹介するのは、「家族にとって私は○○です」の○○を埋めてもらうという設問です。「家族にとって私は大切な人」、「かけがえのない存在」と書いている方もたくさんいますが、中には「楽しい存在でありたい」「必要なのだろうか」と自信がなくなってしまったり、「なんだろう」「よくわからない」とわからなくなってしまっていたり、「必要とされ

たい」という願いのようなものもありました。「大黒柱と言いたいところだが、つっかえ棒ぐらいにはなりたい」あるいは「くさいと言われる」「いないよりまし」「運転手」「お財布」「要らないもの」等、非常に苦しみながらも頑張っている姿が少し見えました。

今回の調査結果は、まだ十分に分析できているわけではなく、途中経過ですが、この時点で考えてみると、友達であったり、体力頼みであったり、社会を教えることであったり、父親の役割にはクエスチョンマークがいっぱいついています。いろいろ迷いながら父親をしようとしていることがうかがえます。それに引き換え、母親の役割は「母性」としていわば確立されており、これに対しては「かなわない」という意識が、子育てに積極的な父親であっても、どうしても存在するのではないでしょうか。

「母と子」への父の「参入」？



われわれ三人のまとめに替えて、この図をご覧いただきながら整理してみます。父と母と子を家系図（ジェノグラム）で描くとこうです。父と子の二者関係で言いますと、楽しく頑張る子育てという感じです。ところが、父親の意識としては、母と子というのは非常に強く結びついている。公私で言えば私の部分ですが、その家庭に手探りで父親が参入していく感覚を持っているのではないでしょうか。

われわれは臨床心理学を専門としていますので、臨床心理学的な父親支援というものを考えます。手探りで進もうとしている父親に対して、こうあるべしという画一的なものを示すのではなく、それぞれの今できていることから一緒に、考えていくようなサポートができたらよいと考えております。先ほども申しましたように、今後この調査結果をもう少し詳細に検討して報告書にします。甲南大学人間科学研究所のホームページでも、報告書ができ次第公開させていただきますので、この続きはウェブサイトでご覧いただきたいと思います。どうもありがとうございました。［拍手］

高石　ありがとうございました。何より若い男性の研究者による父親の子育て意識調査ということがこういう形で現実にできるようになったこと、それ自体に非常に時代の変化を感じていただけるのではないかと思います。

区内の調査で幼稚園児のお父さんの回収率が四分の一ぐらいだったんです。それでも、それだけの割合の父親たちが意識を持ってなんとかして協力しようという時代になっていることがこれから期待の持てるところでもあります。ただ、その意識の中身というと、なかなか神話は手ごわいぞというところで、意

識の部分では努力していても、なかなか深く根ざしたものにとらわれつつ、次が見出せない現状が少しかいま見えたのではないかと思っております。